

〈特集〉シンポジウム

戦後の歴史と歴史学

特集にあたって

白川 耕一

二〇一五年は第二次世界大戦終結「七〇周年」にあたる。安倍晋三首相による「戦後七〇年談話」に注目が集まったにせよ、私にとって印象深いのは、二〇一四年のほうである。二〇一四年八月のある朝に新聞を広げた時、イスラエル軍によるガザ侵攻、シリア内戦、アラブ地域における民主化の後退、ウクライナとロシアとの間の領土紛争、そして、日本、韓国、中国の間の領土や歴史認識をめぐる確執など、「紛争」、「戦争」、「対立」という言葉で埋め尽くされた紙面に言葉の失ったことを、私は記憶している。ポスト冷戦期における、時代の転換を強く予感させた。

変化は既に始まっていた。グローバル化、中国の台頭、東日本大震災などは、暦の上だけでなく、意味の上でも二〇世紀が過ぎ去りつつあることを示す。近年、歴史学の在り方を問い直す企画が続いている。二〇世紀から二一世紀への転換期は、戦後の歴史学界を支えていた世代が引退する時期に重なり、史学史を再考する契機となった。だが、それだけではなく、変化する社会をいかにとらえるか、歴史学の認識能力が問われているのであり、これまでの歴史認識や歴史像の点検が不可欠になっている。

さて、二〇一五年四月一八日、メトロポリタン史学会は第一回春季大会シンポジウム「戦後の歴史と歴史学」を開催した。「戦後史」が「現代史」を意味するという意識がいまなお私たちの間で強いが、シンポジウムは現代史の描かれ方をテーマとした。時間的な隔たりが小さいため、分析対象が歴史研究の領域に入っていない場合が少なくなく、さらに研究者自身の生い立ちとも重なるという点で、現代史は古代史や近代史などとは異なる性質をもつ。政治に対する学問の自立性が脅かされている日本にあつて、現実の政治と歴史学とは区別されるべきである。だが、歴史家は、彼らが生きる「今」と研究対象である「今」との間を往還しつつ、時代と格闘したのではなからうか。生み出された現代史像の分析を通じて、学説をたどるという意味での史学史だけにとどまらず、現代史、研究者、「今」との相互の緊張関係を、シンポジウムは俎上に乗せようとしたのである。

第二次世界大戦の終結が大きな節目となった日本、韓国、(西)ドイツにおける現代史の語られ方に、私たちは注目した。無論、七〇年間の三国の歩みは同じではない。日本と異なり、ドイツと朝鮮半島においては分断国家が成立した。ドイツは一九九〇年に統一される一方、朝鮮半島の分断は今なお続いており、韓国史では一九八九／九〇年の冷戦終結よりも八〇年代の民主化と経済発展の方が画期としてより大きな意味を有している。日本現代史について報告した戸邊秀明は、同時代史としての一九五〇年代の語られ方、歴史学の対象としての五〇年代のとらえられ方の変化に注目する。鄭榮桓は、第二次世界大戦後から現在まで、いかなる範囲で、どのように朝鮮現代史が論じられてきたのか、その模索の過程を跡付ける。白川耕一は、人工的につくられた国家、西ドイツの自己認識と歴史像との関係を明らかにしながら、西ドイツに適合的な歴史の語りの形成と、ポスト冷戦期におけるその限界を指摘する。現代史の語りの国際比較を試みた点はシンポジウムの特徴である。

シンポジウム当日には、下田淳(ドイツ近代史、宇都宮大学)、佐々木紳(中東近代史、成蹊大学)、三品英憲(中国現代史、和歌山大学)の三氏からコメントを頂戴した。記してお礼申し上げたい。